



園部 秀雄 (荻原晴子氏提供)

「秀雄」という名前から、みなさんは、男の人を思いうかべたのではないでしょう。しかし、園部秀雄は、薙刀一筋に生きた女性剣士なのです。この名は、薙刀の先生の名前「茂雄」の「雄」をもらい、男の人より優れた剣士なるようにとつけていただいたそうです。二メートルもある長い薙刀をあやつり、技を仕かける試合で秀雄が負けたのは、生涯一回だけと言われています。

秀雄（幼名たりた）は明治三（一八七〇）年、仙台藩士日下陽三郎の六女として上野目村（現在の大崎市岩出山）に生まれました。

たりたが一七歳のころ、人生を大きく変える出会いがありました。近くの町（古川）で薙刀を見たときのことです。そこには、薙刀を自在にあやつるりりしい女性剣士、佐竹茂雄の姿がありました。美しく優しそうな女の人が、するどい気合いで相手に立ち向かっていく姿に、たりたの胸はふるえました。

「おばあさま。私もあのようなすばらしい薙刀の使い手になりたい。薙刀を習いたいです。」

「私も若い頃は、身を守るために薙刀の稽古をさせられた。しかし、今は、薙刀の時代ではない。女らしい修業をすべきではないのですか。」父も薙刀の道を選ぶことに反対しました。



薙刀を振る秀雄 (荻原氏提供)

「このわしも、あれほど磨いた刀の腕を、今は薪割りに使っている。時代は変わったのだ。」（でも、あの薙刀は、戦うためだけにあるのだろうか。）

たりたは、猛反対する父をやつとのことで説得し、親元を離れ、佐竹鑑柳斎・茂雄夫妻のもとに入門することができました。薙刀を習いたくて入門しましたが、食事の準備、洗濯や掃除など、家事の一切を任せられ、練習の時間が十分に取れません。茂雄先生に技を教えるもらえるのは、ほんのわずかな時間でした。早朝に五百本、みんなが寝静まった夜に五百本、一日千本ずつ薙刀を振る一人稽古を毎日やることにしました。そして、めきめきと薙刀の腕を上げていきました。薙刀の技術ばかりではありません。茂雄先生が教えてくださる武家の女性としての心構えや作法、縫物、掃除の仕方などを、確実に自分のものにしようと思ひ、努力をおしみます。たりたが「直心影流薙刀術の免許皆伝」を受け、「秀雄」という名前をもらったのは入門して二年半後のことでした。

秀雄は、遠くに住む父の顔を思いうかべながら、道場に立ち、薙刀をじっと見つめました。

大正七（一九二六）年ごろから、女学校では体育で薙刀が取り入れられるようになりました。このころには、秀雄の名は、負けを知らない女性剣士として全国に知れわたっていました。秀雄の薙刀を振る姿は、凛として美しく、切れのある動きや見事な技は、剣士たちをはじめ、多くの人たちに感動を与えました。

昭和の始めころには、薙刀の指導者が全国に必要となってきました。昭和十一年、秀雄は「修徳館」という薙刀の道場を東京に建てました。秀雄、



薙刀の指導を行う秀雄 (荻原氏提供)

負けたのは生涯一回だけ…
文献によっては二回とも言われている。

生涯…
生きている間、一生。

幼名…
幼児の期間につけられた名前。

直心影流薙刀術…
様々な薙刀術の流派の一つ。
「天道流」という流派もある。

凛とする…
態度や姿などがきりっとひきしまっている様子。

六十七歳の時でした。

薙刀を通して、心を磨く教育を広めていきたいという思いがなかったのです。

秀雄は、薙刀の試合で勝ったとか負けたとかということより、大事なものは、「一心に相手に向かうこと」という教えをより多くの若者たちに伝えたいと考えました。

道場の朝は五時から始まります。

「大先生、おはようございます。」

館生たちは、眠い目をこすりながら、我先に道場に集まってきました。

「おはようございます。」

秀雄は道場に入ってくる館生たち一人一人のあいさつに言葉を返していました。館生たちが姿勢を正して秀雄の前に並び、朝礼が行われます。目と目を合わせ、

「礼。」

朝稽古が始まりました。

「エイ、トオ。」

館生たちの気合に満ちた声が、道場にひびきわたります。稽古は、その後、午前と午後、夕食後の夜も続きます。とても厳しい稽古でした。秀雄は、薙刀の向きや手の振り、足の運びなど、一つ一つの動きを見守り、技の指導をていねいに行いました。

また、秀雄は、自ら薙刀を持ち、構えの姿勢を見せることが、何度もありました。秀雄の眼差しは、いつも真剣そのものでした。

ある日の朝礼の時のこと、

「夕べ、流しにたくわんが何切れか捨ててあった。たくわんも大根として土にあった時は生きていたのです。」

と、秀雄の声が道場に静かにひびきわたりました。

「薙刀の技術を磨くことだけが大事なのではない……。薙刀を持っている時だけが、修業ではないのです。」

館生たちは、はっとしました。

(この子たちには、荷物にならない土産をもってふるさとに帰ってほしい。その土産をたくさんの人に分け与えてほしい。)

館生たちは、秀雄のこの願いや思いをしっかりと受け止めていました。厳しい薙刀の稽古でしたが道場を抜け出す者は、一人もいませんでした。「一心に相手に向かう」とは、どんなことに対しても、前を向いて精一杯行うこと、そして、やりっぱなしではなく物事が終わった後の心構え、身構えを大切にすること。薙刀で大切にすること「残心」という心得。

秀雄は、修徳館での毎日の生活から、このことを館生たちに伝えていたのです。秀雄は、道場を卒業していく教え子一人一人と、薙刀の相手をして門出を祝いました。その時、教え子たちの目からは、いく筋もの涙が流れていました。

戦後この道場は閉鎖されてしまいましたが、秀雄の教えを受けた者は、約三千人と言われています。昭和二十八年、秀雄は現在の「全日本なぎなた連盟」を築くことにも力を注ぎました。薙刀が学校教育の中でも発展していく道を開いたのです。秀雄は、九十四年の薙刀一筋の生涯を閉じました。

現在、学校教育では、「なぎなた競技」として、全国各地で練習会や大会が行われています。



卒業生と向き合う秀雄(右)(荻原氏提供)

園部 秀雄

園部 秀雄は、明治三(一八七〇)年、宮城県玉造郡上野目村(現在の大崎市岩出山)に生まれた。薙刀一筋に生き抜いた女性剣士であり、大正・昭和の時代は東京の女学校や道場「修徳館」で薙刀の指導を行った。礼儀や、誠実に謙虚な関わり方など、薙刀を通して心を磨く教育を目指した。

残心：
日本の武技で、攻めわざの直後も敵に備えて保つ心の構え。剣技で、相手をたおす打ち(突き)を決めてからなおとる静かな構え。弓術で、矢を射放してなお見定めるのに崩さない構え。

全日本なぎなた連盟：

戦後、武道が禁止されていたが、薙刀術復活のために関係者が集まり話し合いをもった。昭和三十年に連盟を発足。
「新しいなぎなた(なぎなた競技)」として歩み始めた。